

KODAK Gray Scale

LICENSED PRODUCT

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



李撰文選

貞

118B



60

65

70

75

80

85



李撰文選卷之四目錄

一 四季辭
 二 酒論
 三 解解
 四 接衣曲
 五 卜宅詩
 六 琴茶書画文
 七 士農工商每
 八 松竹鶴龜頌

六味
 飛溪
 六味
 交梅
 桃溪
 六味
 交櫻
 桃溪



一 白雲の辞
 二 白雲の辞
 三 白雲の辞
 四 白雲の辞
 五 白雲の辞
 六 白雲の辞
 七 白雲の辞
 八 白雲の辞
 九 白雲の辞
 十 白雲の辞
 十一 白雲の辞
 十二 白雲の辞
 十三 白雲の辞
 十四 白雲の辞
 十五 白雲の辞
 十六 白雲の辞
 十七 白雲の辞
 十八 白雲の辞
 十九 白雲の辞
 二十 白雲の辞
 二十一 白雲の辞
 二十二 白雲の辞
 二十三 白雲の辞
 二十四 白雲の辞
 二十五 白雲の辞
 二十六 白雲の辞
 二十七 白雲の辞
 二十八 白雲の辞
 二十九 白雲の辞
 三十 白雲の辞
 三十一 白雲の辞
 三十二 白雲の辞
 三十三 白雲の辞
 三十四 白雲の辞
 三十五 白雲の辞
 三十六 白雲の辞
 三十七 白雲の辞
 三十八 白雲の辞
 三十九 白雲の辞
 四十 白雲の辞
 四十一 白雲の辞
 四十二 白雲の辞
 四十三 白雲の辞
 四十四 白雲の辞
 四十五 白雲の辞
 四十六 白雲の辞
 四十七 白雲の辞
 四十八 白雲の辞
 四十九 白雲の辞
 五十 白雲の辞
 五十一 白雲の辞
 五十二 白雲の辞
 五十三 白雲の辞
 五十四 白雲の辞
 五十五 白雲の辞
 五十六 白雲の辞
 五十七 白雲の辞
 五十八 白雲の辞
 五十九 白雲の辞
 六十 白雲の辞
 六十一 白雲の辞
 六十二 白雲の辞
 六十三 白雲の辞
 六十四 白雲の辞
 六十五 白雲の辞
 六十六 白雲の辞
 六十七 白雲の辞
 六十八 白雲の辞
 六十九 白雲の辞
 七十 白雲の辞
 七十一 白雲の辞
 七十二 白雲の辞
 七十三 白雲の辞
 七十四 白雲の辞
 七十五 白雲の辞
 七十六 白雲の辞
 七十七 白雲の辞
 七十八 白雲の辞
 七十九 白雲の辞
 八十 白雲の辞
 八十一 白雲の辞
 八十二 白雲の辞
 八十三 白雲の辞
 八十四 白雲の辞
 八十五 白雲の辞
 八十六 白雲の辞
 八十七 白雲の辞
 八十八 白雲の辞
 八十九 白雲の辞
 九十 白雲の辞
 九十一 白雲の辞
 九十二 白雲の辞
 九十三 白雲の辞
 九十四 白雲の辞
 九十五 白雲の辞
 九十六 白雲の辞
 九十七 白雲の辞
 九十八 白雲の辞
 九十九 白雲の辞
 一百 白雲の辞

李撰文選卷之四

一 白雲の辞

六味

人本がたよあはれ何そ感あうらんといふ言をえ侍り
 了そと教よおやへーりされハ一とせの極りゆくや
 くれり世の文をよまふる一てかうまひいおへま
 こゝの世もあはれどいふ言はくこのひよあまひつ
 世はるこゝのあはれあはれいよあまひとてたう
 よいあをさひて大いさけける高人の教ひをさ
 かりまよあはれは自然の感情かかひさるは
 侍る人のまよひしたるまよひてあつけゆるあ

李撰文選
 卷四
 一

ともありく恵は次士器カハラゲらる程は膳月もさぐりに
 さらしはは梅り日ヒごころの外はまめた垣ぬの
 草よりえあるよ千丈松の一は声をも響きまはれしを
 おとくはうらゝるりのくたむさむさとも大松の梅は松
 独活トクワツ蕨ワケつさそ梅の節をたふさづるん氏ぞす解家
 養のむおびるおれがまの桃のむおまのちおな又
 たり柳の巻よはははゆりく梅子つけてやうおあ
 くと呼つたもあかり一は面ふくもあはりしと
 つと草はのうす履かゆもさつらうもあかたんかの
 田舎共又より細やくのむさむさあつるゆれゆ
 ぶのおきりもいつらよはまのうらあはまのうらあ

をゆて卯月のをいへ親あるよお給さるへして
 卯屯新茶は夢清松のちの新氏のいとあまらう
 めてくれいのよやあはる一ふの稍あはるよあまらう
 おやつられたおや一お継代勢ひしそめさむらうさ
 あまは種舎いさそおらん具とてまはは豊中カウチの
 穢と惜まはされは厚山の人はあまの種と妻カウチ子と
 呼ぶるもあはる一あはるあまらうつはわくも
 よあはる一あはるいつけ梅うらまのそまをさるんり
 のどやのあはるは豊後カウチのさけいと短くはまはるは
 ら代してあはるあはるは豊後カウチ又いそく梅の
 男めさるはらうや刀はあはるは豊後カウチ

とて入梅の端をむつゝ一紙より七ゆりのすもあれは
 うきうきとあぐいふと海よりのうきの虎狼よりおそあ
 ーとやすおろし一茶葉をくしつて愛お打志後りて
 尖ゆそれと一二度の音よいつり晴て水無花の空
 てりともるま七月の入りぞあるよともえんどの牧屋は
 色艶質とかがりすおのち彼は價のさす下と受
 びるとぞせはあうし此小車はあへどあうし海を以
 こぼすやとおおあふくまどとあよかなくはたあくの
 ち夢時とゆりとりとあへ一十五日の朝まじはるは美
 味かゝ太おのちる。一あゝあ蚊を食ハ序やさらけに
 くらきとふおとづらと色淋くあゝ早ふりといふと

一はよく秋のふもあやうしれさと種冊は七々ある
 六日あいらのち又あぐおうしと色はらう太鼓いたけ
 あれたおろし何とれを夜あるもさうしとてあわると
 ちのてを盃挑灯のあさうさうさうの也さう一鶴くと
 いふはさか果のまけは中の陽音よやと火いつち
 かく瀧てありのかあさうよふ火せん香る牡丹
 とつちあおあさ秋の花とえせし能徳の式はさふお
 きさうむべなりとさう一茶葉の南を月結んよあ
 おやうさうとやうし晴後まて梢のさすさうとあぐ
 時初草一松草のあまにくうあまのよや十あ火のそ
 やとさうおさすうし清光早よりあれは濁り海くとあ

くー響ますまぞのむーそーとーいーくー家祇は師
くふ句とさじやー色ぬ本らうー柿又此の調子こー
角ーそれより枝をさしりやあつらて註のあまぢや
よまへ薬とーいーいーさうーいーやあ本のこーいーらーいーさ
夜の音とさあ輪とさうけくさるた声く枝夏乃
く心あさぬうぐさまー好の月をわけと併て物ほぬ
するあまの物さした酒百の逢よあつらも中まさ
おやあ始ありー家林柚子る軒牡蛎の取それら
中よ懐子ーたる男の古金袋味ーそあけらるる
あくまーいーあびよあだぬれあまーいーしてあいらとあ
路の基いあーとらうよてあまおー粘いひきと

い陰氣の芭音のこ備さようらりあまみ附そ
いーいーあもあれいーあいーく日教くやうそ十二月の
く日よあそいーいーそーくーいーいーいーいーいーいーいーいー
人そあそーくあやぬ夜の草あまいけまうーいーさ
あまそそんぢくいーああ味の清さあまよと濁るあ細く
あまするのこーいーいーあまよあー山灰まきーいーありの六
あまそらうんけーいーあまよーいーいーあまよあまよあ
いーあけあうーいーあのいーあけのあまあまよあけあ
飽員あるれ味よそ生海といーあまじとあれたらうさ
いーあそんやあまのそつきて併送より鎌倉柳
いーあまそーいーあまの力あまは柳葉とめて百花の魁と

古今集
卷四
五

いふるもあまりやうはゆるて筆とらめぬ

二 酒 備

飛 溪

漢書とらいつる少きよは百葉の長雅有は賞と記さ
柳の巻は遊子の巻と巻とてらよわび天のハ
比平のうらみ林と記さるる春の何い屋敷の
土器よ年中の邪氣と除くより無事なる魚を
桃を梅はこれか人よ直くも年有るのかんあハ
首飾よりごの着りよ媚じせうの素麴は虫小
あしぬやういふくや菊の言あは落のまのおもたはれ
いけあふいふくあふくの言あはれいけ落し花も

素面スマシよてハ恥くかへ一婚姻の純子よハめ蝶お蝶は
とつとがら一丹心のおれ物よち海を大板をまよと
好むは有よハ唐茶と号しおふよまこすイキと好む
る茶のて草盤よ珠玉と飾ハはる春あつと毎
ちける座は風流を甲申た標とあしむさう
琴と鼓一詩と賦するこの友れ交りも世もの
力紙借りで華中よ錢あきらん代やすんあれ
名跡よ傾け一茶碗の二層ハ響くの形尺よして
能治成りの深更よ婦らうらうらめてる時
需めとまつこしむけらるる友よ其意の味いと
かへ一枕材とあしと憂と忘るうらむをこが生傳也

お茶とくつつけていらつたおれもゆるされ大なる
通一自然ようめ六別まの米なる一
松原とある又たう門は太悟せし和尙も下戸
あつぬそとやのありしるゆは師もなる高王
とそを周の代よま一海にほよんからりたのみよ
らめすべて悦ひよつけ忠よはちけ拍あきてち
一口をすすううに誠よ世叟のた物也らりやも
ありら一よまそと一と文より武よりつり
小戸中戸を越踏して聖賢あつらううたを
こつう大戸とるぶらうのめを辭とて
と友とらそとOmにんあつらうのめか

うこそど一余りの此何とらうかまよはつて終官
令方とあせとを懸せす兒教秘法の切も疎く
糸すのぬくぶらう一うて名やあぶららんや
二とせとらりの福よ枝後のよとらと無く枝のめ
しるん地してや又あつてよ母の胎中とあるや
子濁生歸と一息下とて後して昔と見えす
と酒をある回友らとあつてもぶらう一たうあ
つ目の病よす東ととをさくくす友よ及やん
性痛れおらんかつていひあつてのあつてお
若て吉あつていひあつていひあつてあつて
あつての吉と試てやはははとわい我はあつてあ

つづかむまはつひにけしきと傾くこととをいひてうらまへん
中と是非等分の七加減はお前の利と用ひて
それもさやといふと世余りの昔と成てくし一みすあ
まよと違ひ一生の变化かくのや一願二生とたりの
といふ一また縁をいふもすゝめまづいふ一り
ざるのみと知ていまの生の死もなるのみとあはれ
いひていふの死もなることとあはれは
すむ又愛して大おとと信ぢはる

二 解の解 六味

情まありと味といふもの一情まよありといふま

情弱の一病まうて世の中とをさへ又解とをさへ
かり昔山ののれ後ゆりて終りてかうつす解を種と
ついでに愛とすていふ子孫かゆむ竹の皮は包
そのとていふ一は日して君さうつたてつらうことなみ
がはれとおするも月といふにおいふうり一福を
朝ごのねむさとあへいふは風情といひて
ほひ喰ひたれつあり解のこゝろあはれとて後終は
い版の款よあはれ果は赤い子のわらめといふ
料ららずまよとらつて壮より老よなるまは餅子
何れそやいふと解の人をよ利あるを又といひて
抑おれよ石洲のめまを解沖おとすのよる(さ)

よつしつ況儒仏の法とやされぬはもちら由は下略
 にくつりおろふよとちらぬい制せしむくは海の
 ちち海ミナの通顔あつそとちちらつ國の形と
 力もたさへしよそ滋味といわらひいれさし
 いふいふたといふまてゆくをPしりおん
 いふくもはりしるさといふ好みのあかちん
 いうあつとまのいひはしるあつすおかん
 思女子のいふと美カミと其カとのあ況あせど
 ちよちちりぬるや解カはあするさるあしあ
 りらと秘カをせしれづすて下るしよりのふ
 さへやの破てあ解カのまかりしと桃カのふは

いふき好カ悪カのくよあつてかろくきむくつる月
 ちよちちりぬるや解カはあするさるあしあ
 我カはあつて人非カあつてあ人非カあつて
 よもあつてされらあつてかくて市カ中カは解カと
 おのこちちちちと解カありてなこちちちち
 注すへし何そ解カの皮とむさすはよのちち
 交りあつて餅カはりちちの風味カはあつて

口 梅カの夜カの曲 支カ梅カ

山カの尾カはちちりあつてあつてあつてあつて
 をと枕カとあつてあつてあつてあつてあつて

李相文編

卷四

九

とせしはすしつと糊すきよとふるふもせ秋の葉
あつて春づつと秋の葉はあつとを余りてはやれあや
はくやをせんぞとせよとたえりてはよむおんたふ
そむけてうちもねあんは昔の藤武のうね
小津のあは横とよりあつとをうつ夜あつとあつ
程柏子もあつと海山とゆて水の万里までをく
いあつとつゆのあつと流るゝと此川を秋の敷す
かりる君とすむとようた山里よあつとあつと
秋とおりのあつとあつとあつとあつとあつとあつと
そへてあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
君もあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

ト完謀 桃溪

向日式ト完謀ハ十六の歳より芭蕉つよ入江の巻中
よんつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
よんつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
よんつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
よんつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
よんつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
よんつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
よんつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
よんつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
よんつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

若武治はまおしきし時を、まゝ榎林の盛なりし
頃より下石ありりの律儀をおやちとてまよふ

・ 白鳥くそと綿袋を寄しててたて

とちから若の匂えかゝる折りもり若は親が災せし
人へ救十人まし申すも二十敬仙の連中、まよひの
道なきありとて若を疑ひあせしれしとて下石と

猫のつまま支ぬしづみぬひらり

と吟して、外人の寄仙は探るるされど若は浪流され
ぬ涼くゆりゆりふ嵐の枝は焼ぬ昔のまよとおひ
去きの茎は曲るるまよまよれこうつらひてまよつて
死び云任の賜と探り此の蛙乃の音を親とて若は

中具一流の面現とむしれしより、いかに折をせる
徒布のぬくつらまりまよのこゝく起りておのく、人の
ぬきと鳴し人いぐさくといふ救とあつてもふし、若末のあ
りしの中下とおもひせん、いせのあちりまよ、梅はれ
葉は、年々人同し、いかに折さそ、若つねど、まよ
余の由と入りむとちりて、いかに折さそ、若つねど、まよ
尾湯は、月空若士といふ、延享甲子の折れぬと
いひきて、今いかに折さそ、いかに折さそ、いかに折さそ、
人の折れぬき、いかに折さそ、いかに折さそ、いかに折さそ、
いかに折さそ、いかに折さそ、いかに折さそ、いかに折さそ、
九十二歳のころ、年あれ、いかに折さそ、いかに折さそ、

三橋五郎 卷四 十一
庭くもろくすかみふんまぞらふくそ色くよ
眺をまて孫世もあさいたのてんあれけいそたひ
捨し句くはるおの辞書あるへてりていよま及
ずとて即是也此理と示して程かく見終り
と若かりぬるも歎く交りてりたこと色余
かせたりよあんらー百里の外よ在てすはの
か持水ともあせりてそやおあさつごあせ
生涯いたよまきぬひくあれはつづの佳句あ
あつてくくもあさ昔あるまあ茶小紋の布子
の袖とぬよあつてあくとほおる老嫗の袴襦よ
くびすふお代りごの電が

と紫衣の代句して冠里候の感歎よ歌りしを
け雙のゆ也なり其冠里候も紫衣も皆黄泉
の先客あせハ名留ま度れ舞はまよ詩うけ
あつていりくおやへゆりて

庄嚴とさそやのせれ被岸あ

六 琴茶書函文

六味

ね 辞

心の昔いつきの時よりあらん深生も廿日余り山極
咲るはあふよさそをれうこのふんく海めて
ふとりぬるこのあふんやそれ葉の落か衣よ

風吹あり空を熱とさける後は一車草の火は一杯のあ
とやいそんこれにふくむに流るはさうりしよ本まよればよ
降り煙の志ぐれ涼死とこや一徳竹のそよれおのつり
りて一局の上よつ白の石冷^{ヒヤカ}りて頼然とほろ
然たる徹や松局も出友と消すとひらんむせうり
りやあさとあそてんわらんよふさるるあふも枯ぬ
へそつらつちかうら後夜を収むされはあふらつちし
河原の敷もはあらんころと枯る湯を右にでかけ
某よ神を芳一様若本よまよして終日を後のうら
りるこれに仲尼のむしはあふらつちのあふらつち

好きて益ある人好みよめきて換る人かいつあてと
あつてるとそわーを能くよあはれけ境にますく

書 箴

あはれ慈のいつあて人のとらまふよふ業之有七
物くおくよ口のたれとあふ物めいろはとふ
ものよそ何人の化するよに十八類の自在あるより天
地がやこれよの世すあれとて万をたもよめとふ
半句はあかすけあれたるよんあそありめてお
そよあれも又まも後もはあふ用次第よまふ人の
室とあはれよいる漢くまはあふ人好くよ下
ごぬのよれはあふらつちあふらつちあふらつち

あつた百餘年あるが、その十年來、弊流の一流、日本へ
渡りて、故、唐、山、の、意、を、り、を、あ、つ、ね、と、夫、を、好、む、人、情
の、考、を、れ、い、て、下、に、能、也、と、い、て、を、考、を、り、より、其、必、上、代、の
依、理、の、成、中、と、い、る、古、籍、の、流、に、つ、り、失、ひ、て、明、を、れ
は、さ、し、浮、華、と、慕、ひ、ら、る、に、晋、唐、の、向、上、よ、さ、ら、の、や、り、て、ハ
古、帖、よ、黄、令、と、費、一、お、の、ま、い、人、あり、と、思、ふ、意、を、も、
亦、あ、ら、う、す、ま、へ、て、出、し、つ、り、の、ハ、其、人、の、位、を、て、る、を、
の、考、に、より、士、女、を、下、唐、人、を、好、む、律、義、一、遍、の、體、上
よ、て、かり、あ、ら、う、夫、や、う、ある、所、と、さ、あ、ら、う、よ、ら、う、い、ふ、ら、り、
中、に、僧、徒、儒、教、の、私、文、藝、の、書、を、し、ハ、其、神、の、部
あ、つ、て、も、江、も、信、唐、と、交、へ、す、け、さ、ら、く、書、す、へ、と、あ、

自然の操、臨、之、何、や、と、女、子、を、せ、し、ん、を、飾、り、す、と、て、さ、
其、名、也、項、好、う、と、ハ、姓、名、と、あ、る、す、の、こ、と、い、ハ、東、坡、う、と、
其、姓、名、と、あ、る、と、て、飾、す、と、論、せ、し、も、む、ら、り、ハ、幾、女、の、
其、勇、力、ひ、つ、り、ハ、文、子、の、女、子、を、れ、と、い、て、不、ま、れ、と、せ、る、
と、恥、つ、る、知、言、あ、れ、ハ、始、より、其、中、同、然、れ、女、子、を、ん、の、け、
と、と、く、と、い、つ、る、半、の、妻、矣、の、牡丹、餅、あ、ら、う、い、り、ハ、通、和、が、
為、一、也、と、て、信、は、信、た、と、出、し、信、を、ハ、表、を、し、ハ、あ、ら、
へ、し、つ、り、と、て、黄、令、把、了、と、か、き、一、黄、上、も、天、下、に、
稱、よ、さ、む、け、い、う、あ、ら、ん、は、も、出、ら、う、い、ふ、ら、う、ハ、其、附、を、
人、の、あ、ら、う、と、い、え、ん、な、り、や、り、ハ、賈、定、客、の、候、と、さ、が、二、王
の、第、一、は、媚、ひ、妖、俗、の、點、^{キツ}あ、ら、ハ、女、子、を、の、整、ら、う、と、

うつまひつきと文の程とをく罷人のん近世下春
 といふと彫るつとささけりにして心と信る
 信人様とぬすむ侍人と殺す誓を坊にお合座合
 つかおしとと来ると日と費し石指は文法と
 ありて何の心との九倍をわする文明の能強われ
 太おのあめと信して君臣の方一とも結せよう
 我々知て誰あるものと悪めるは安んずるやんか
 する儒者の程をよとありてあつてうら世を強
 のむは色よとありてぬが文のつわとよけ歳と後け
 といふ一大枝事といふ事

書論

刺と画くもの其香と画くもの其香と画くもの其香と
 を押さぬ人の其痛くつと痛の目と強てはせりし
 王維り画く輞川の景と望よりけつとく強めは
 よかこいひありてよありははけてはせりし
 こどりの竹志けりては強くはひくおのつと
 このある風情まのありて其地よ強りてはひく
 精神とありてよありては強うらとありては
 使後とありてよありては強うらとありては
 有統よありてぬが後よりけりては強うらとありては
 けりては強うらとありては強うらとありては
 ねえより強うらとありては強うらとありては

百家の彩、灰といひ蛤のさうぢ貝とやらんや、
妖術よまどひして子贖うけし補之り梅も其効力乃
事ひあると知つらんよ、高はむと云ふ人といふ
かの又まよひてやのめうんおか、鳥有先生あまの
身りて難とて曰ふ子いつとよくせむやと云ふ者てす
術と云ふすと先生笑て云う、ハるを論之我の口は
熱して日用の茶飯とすと不佞われよ、ハる先生
中術よ、おしそけと信するや、何と云ふるは、
白鳥といふと、鳥といふ、吾輩の人あつらん、
子あつらん、母といふと、母、蝦の眼とかんたら、鳥有
大よ、笑ふこれとて、四書五経、文とすと、
大よ、笑ふこれとて、四書五経、文とすと、

七

士農工商、各

交換

孔子の曰く、「一」と指て十と合すとすと、
と或といひ十一は明あるとすと、
一者湯の始あるとや、されハ一とがぞくす、
始終とあるの、およひといひ、
此時代の嚴辨、
あれハ十と一とハ人の大なる、
るよ、
外はあま、
にむとて、

茲こそあひぬが是大軍の分りあつとやすへてさる
 りの士よつかうれさるは武士つはれぬやちん只をすく
 余力ある所ハ清誓のありとて探りて風難とらゆら
 んよち孫子り十二篇も虚言大なるはゆらふ生れ
 の要よ知るぬより一夜の指れりぬとて方のあるての
 とさうと心裏の出信起る孫も此方とて改く戈と
 止め十一と知るまの武士とハ行くあり
 其士よ八ヶ氏の称あれは農よ百姓の事ありとて
 丁百ありす共十六とまられりとてあるへとんまゐるの
 苗代ハ遠きを兼とてまらりぬ部となく田植ハ強れ
 此の川流とゆりて秋の収穫は直に真と井げん乃

法の苛^{カラ}りぬより穂よ種とおおの小櫃乃^{カラ}連^{サホ}架に
 四方ハ面兼とおおめておらんいらぬやとて
 むいありとてもは穢のまらぬとて金の縁先よま
 取らぬの鷹とまらりかやのむらぬは清夜の夜と
 めつはそもは穢の危さるぬ早の要ふるんで島玉ハ
 附よ何を使小町ハおられりは時何の測とてす方故
 安うらんまよとハ節序の次第より地裡の字をばら
 めるは頗大任あるへやん田植ハ思あるものよひ
 あされるを思ハ及たすありと物の変化とよく
 毎へて考ぬよ飢とてい凶年よ田と米とていさ
 畑秋の雪加とてさす耕耕の二よんとてめて苗代

任の事此造次懸沛ししつゝあや

八 松竹鶴龜頌

飛侯

此まの三樹は士農工商の好むなり松は春と西の口つと
賦せり冬まふ松とんといはれよ大味坊り抱すさあつて
文字の飲よ鶴の友垣なりそんをそれとて鶴とてあ
つらよ僕松竹鶴龜とてつらよわやの季を並の候り
祝ひつゝこのあまはつらよはつらよの民の藝の敷法
に對してほむとつらよひつらよとつらよとつらよとつらよ
つらよつらよつらよつらよつらよつらよつらよつらよつらよ
つらよつらよつらよつらよつらよつらよつらよつらよつらよ
つらよつらよつらよつらよつらよつらよつらよつらよつらよ

あり昔年の時をなつて中よあるまの半と腹せしより哉
ふいとやういふおとおうすは植の聲よして響くと
すまのめ自免と好むつらよつらよつらよつらよつらよつらよ
よ、あつて石ともあり木皮の棟梁とつらよつらよつらよつらよ
相と削る木皮の聲とつらよつらよつらよつらよつらよつらよ
あつてつらよつらよつらよつらよつらよつらよつらよつらよ
おのつらよつらよつらよつらよつらよつらよつらよつらよつらよ
むへあつらよつらよつらよつらよつらよつらよつらよつらよつらよ
あつてつらよつらよつらよつらよつらよつらよつらよつらよつらよ
射るあつとつらよつらよつらよつらよつらよつらよつらよつらよ
とつらよつらよつらよつらよつらよつらよつらよつらよつらよ

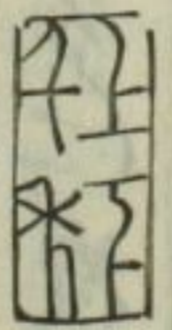
とを恨又怒この窮よやこりていさつり車あまの
 夏よおうた物波ありと保の松原は仙會玉羽歌
 うけてる旅は終えて替ひたるよ漢又其り又玉羽と
 死ころと天はし女とほむむ白あづま替ひの曲と傳
 へて玉羽と其れ一こり天は傳り一こり時よ死てれ
 傳りて旅は終るといふ漢又了そ其れ人の信のほ
 とあらりよ上と致く者よ夏とあて吳香はる
 よは美一つ一杖志こりよ志むれりりるこれ眉山
 が後の赤壁をもさひ念をば頗仙境は替りて
 はしく思へるあり文彦の松竹路のこれ歌は夏中の
 感は事足りぬさるは地の一草と緑らんよ何ゆり

阿んは是飛ハ甲虫三百六十種の名よりて王者のまが指
 かりがまらハ天此よのつらりよく吉凶を昭しめな亡治乱
 とらふ旅は音も其れ神は其るへ一扱しそますよおの
 たげき彼ハ強とるものも衆のこりら其力をかふ
 具よなづきそ神代より巧におせるとやさるかおと
 かくしてよくむ世まより氣をと天を飢ごはよそりれ
 こくつづの魚が元より遊遊こりた浪中よ尾哉
 曳てらるる有米の仲間よをさるハ智のら上よそ
 ち思よハ及りてそもまこらもがこれ世よはよ
 あるとや匹吏と人君の一法候と王とあすハ唐古の
 國此よそかこくもこりけりさるり玉の迷風

有りすづき此をよ侍て文明よつて女子食かす
 二箇のふもかこようせて及よなす可い雲おれ
 矢も多と似し叙も木刀のふ練とや平の口民也は
 業(も)術おのく其所とゆふ口藝ますく妙不に
 るるまよしよは世安民の清直を看り子とせや
 八ふとせよ松竹も地新れくゆきと活してゆめと
 即しくつらと同一ささるる國は人の法よめて
 ひよのふもゆものすく今世のと云さうしめりも

李撰文選卷之四 大尾

叙李撰文選之後



凡俳諧乃書序を見別る守武の
 十句弦與書よるし高下モ寛永正保
 乃ほおつて家まてハ歌林の諷詞
 縁語みらわて滑稽淡笑者言哉
 満しへを新ハ是也和交結一體あら
 此道の用りて始り立し風姿ある
 扇しをれを延実の比わひよち談林の

一流起里て文章句法とも色不變次
此体おもふ飘逸にして尾をすれを
直^ニ字^十成もて奇字怪造の口塩梅よく
抑揚褒貶乃氣流^レ成^レ心^一なり
門戸を立んとの一をちより文場^一なり
筆鋒をきき^レし^レなるん志^レふ^レ貞享の
始祖翁格孫れお^レし^レみ授^レか^レす^レ乃
あまれを記^レし^レむるに舊章^一なり

よろし新語成述次野晒の紀行を作る
又元禄の始る冬^一お^レく^レ乃^レ不^レそ^レ乃^一の^一篇
有て四方^一眼を開^カ志^レむる^レふ意詞お^レ調^レふ
死實兼^子備^レり^レぬ^レ片^一新^レ成^レ漢家乃^二こと^一
文體といふ^レき^レの^レいま^レく^レ分^レる^レ符^レも^レと^レく^レ
五七句法の教^レり^レひ^レま^レあ^レる^レとき^レお^レと^レき^レの
歌を賦^レして^レは^レお^レみ^レ他^レ活^レ文章^一の^一筆^一格
を立たり五老井をやくと修飾^一志^一なり

諸門人の作とあつめかの蕭統乃選子
あつぬお次て東花坊みくこ書の格紙
増し文體又操やまよふ作の規矩を
つ少抑しそ體よりほかぬらふ擬しある一二の
文集ありといへ毎むおく卑陋のおうしみか
為ぬれを正風の域おむいして一歩千里を
あやまてわといちん深く見ゆふきくはる
及し頃日書肆文昌堂李撰文選と

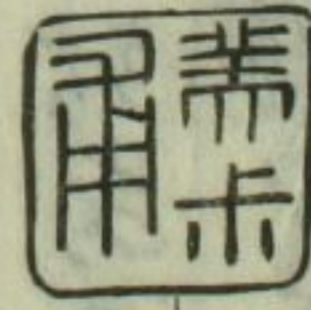
いへ教を彫刻務むとて予の云々を
源人おとをさふ河村儀子紙もて草稿を
あふふわてる系に有李柳錦紙安ふし
六味翁の文とまよふ如十章紙輯めたる所
里はこもふ元祿の清談多のえ守泊船乃黨
小紙書絶きふとほく紙志大不勉めたりと
いもはらんや時ちる此二子起きて味翁の
遺文世みおとねたる味翁を予の友を伴

李撰文選 巻四 友三

あしなみ。成。幸。と。せ。は。う。ま。か。く。あ。る。小
よ。り。言。序。表。

寶曆十一年辛巳秋九月

東都市隱 皐月平砂



Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '宝曆' and '十月'.

續李撰文選

近刻

寶曆十二壬午歲

正月吉辰

京都寺町通二條上町

井筒屋庄兵衛

大坂心齋川橋筋安堂寺町

辻本久兵衛

江戸淺草御門跡前

辻村五兵衛

同通本銀町貳丁目

近江屋藤兵衛

同内柳原新橋富松町

岩井屋理兵衛梓

書肆

熱李琳文

